

テニスと中国の悲劇

中嶋 嶺雄
(国際関係論教授)

「ピアンカ・一九八九」の原稿を依頼された頃から、私は異常な多忙に見舞われた。五月十五日からの中ソ首脳会談は、まさに世紀のサミットであったので、NHK衛星放送の解説や新聞の座談会、原稿執筆などに退われていたのだが、ゴルフ訪中を契機に、中国では民主化要求デモがさらに高まり、五月二十日には、北京の戒厳令布告、そしてこの六月三日深夜「血の日曜日」の大弾圧と中国情勢は急を告げはじめ、連日、私にとって睡眠時間との戦いのような日々であった。

そのような多忙にもかかわらず、依頼された「ピアンカ」の原稿のことが気になつていたので、今日も編集担当の加藤規江さんが催促に来たのに渡せなかつた。これで何回目なのか、と心苦しく思つた。もつとも、昨年は一大学の移転統合とテニスと題して書いたのに、肝心の「ピアンカ」は今もって私の手許に届いていないではないか、と内心では居直つてみたものの、それは加藤さんの責任ではないと思つと、いつも物静かに催促に現れる、彼女のすまなそうな顔が心に焼きついて離れない。

中国の民主化デモが高揚していたとき、カナダ・アメリカを訪問中だった万里・全国人民代表者大会常務委員長は、当初、学生たちに理解を示すス

テートメントをワシントンで発表して期待をもたせたのか、その彼も上海に足止めされて直接北京へ帰ることができず、あげくの果てに前言をひるがえして鄧小平・李鵬らの強硬派に加担してしまつた。万里は、テニスが上手な中国の指導者として知られ、北京の国際倶楽部のコートでよく見かけたほどであつただけに、テニス愛好者としては残念でならない。

今日の中国の悲劇は、共産党一党独裁体制の残酷な姿をむき出しにしたところに生じたのであるが、新しい政治意識に目覚めた学生や知識人がいつの日か中国を大きく変革してゆくであろう。そのときには北京でテニスをすることも共産党幹部だけに許された特権としてではなく、広く中国の民衆のスポーツになるにちがいない。